

機関番号：13701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20520158

研究課題名（和文） 近代日本の〈民族精神〉による〈国民文化〉の系譜——ドイツとの比較を視座として

研究課題名（英文） The Genealogy of “National Culture” by the Modern Japanese “Volksgeist” : A Comparison with Germany

研究代表者

林 正子 (HAYASHI MASAKO)

岐阜大学・地域科学部・教授

研究者番号：30198858

研究成果の概要（和文）：本研究は、1870年前後から第二次世界大戦までの、いわゆる近代という時代において、日本とドイツが、その思想的潮流や歴史的背景に多くの共通点や対照性を有することを踏まえたものである。哲学・文学研究をとおしてドイツ思想・文化を受容し、近代日本の時代精神を体現した評論家の論説を考察することによって、〈国民的自覚〉の高まりから〈近代の超克〉にいたる〈民族精神〉論の内容を明らかにした。併せて、当時の日本における〈民族主義〉の高揚と〈民俗学的研究〉の隆盛に相関関係があることを指摘した。

研究成果の概要（英文）： This study is based on that Japan and Germany have many common points and contrast characteristics in their tide on thoughts and their historical background, in the times called “modern” from around 1870 to World War II. I clarified the content of the “Volksgeist” theory from “national awareness” to “overcoming of modern times” by considering the article of the critics which received German thoughts and culture through the research on philosophy and literature, and embodied in modern Japanese Zeitgeist. Then I pointed out a correlation between the uplift of “nationalism” and the progress of “folklore” .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：日本近代文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近代日本、文学評論、民族精神、国民文化、ドイツ思想、近代の超克、民俗学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究者の従来の研究テーマは、「明治末期から大正期にかけての日本文学におけるドイツ思想・文化受容の意義」、「明治文学の〈批評〉概念成立におけるドイツ美学受容の意義」というものである。その研究課題を遂行する過程で、近代日本におけるドイツ思想・文化受容が、相対的・客観的な日本文化論（国家アイデンティティ）を創り上げ、当時の時代精神そのものを形成していったという見通しを持った。

(2) 本研究者は、従来、明治期から昭和戦前期にかけての時代にドイツに留学した哲学者・文学者の評論テキストを考察対象としてきた。その過程で、歴史学、思想・文化史分野の充実した研究に多くを学びながら、近代日本における〈国民文化〉の提唱や〈民族精神〉の高揚の軌跡を明らかにするという課題を認識した。

2. 研究の目的

本研究課題の主目的は、日本が〈国民国家〉統合から帝国主義的膨張を遂げ、〈近代の超克〉をめざして全体主義体制を構築し、戦争へと突入していった要因を明らかにすることである。

近代日本の評論を考察対象とし、日本とドイツの近代史を比較対照的にたどることによって、〈民族精神〉の高揚による〈国民文化〉樹立への軌跡を浮き彫りにすることをめざしている。

3. 研究の方法

ドイツと日本の近代史を把握する対照軸として、次の4項目を試行的に設定し、各局面における日本の哲学者・文学者の評論テキストを考察する。

- (1) 維新改革後の近代化と国民化の同時展開状況
- (2) 労働運動と結びついた社会主義・アンキズム思想の動向
- (3) 第一次世界大戦後のリベラルな政治文化の開花
- (4) 第二次世界大戦に関わる〈近代の超克〉思想の台頭

以上の4段階におけるドイツの民族至上主

義と日本の国粹主義思想を比較対照することで、ドイツと日本のナショナリズムの類似点と相違点を明らかにする。

さらに、ドイツと日本における民俗学的研究の隆盛に注目し、ナショナリズムの高揚における〈国家〉〈民族〉〈郷土〉〈文化〉〈風土〉などの概念の位相を検討する。

4. 研究成果

(1) 森鷗外、大西祝、高山樗牛、姉崎正治、金子筑水、桑木巖翼らの評論・論説を考察し、彼らが哲学・美学・文学研究をとおしてドイツ思想・文化を受容し、近代日本の時代精神を形成する思想を創り上げていった軌跡を明らかにした。

具体的には、日清戦争後から大正期にかけての日本におけるドイツ思想・文化論が、当時の知識人の意識や国情の実態を反映していることを確認し、国民国家確立期の日本におけるドイツ哲学・芸術の受容の意義について論じた。

すなわち、彼らによって受容されたドイツ思想・文化は、それぞれの批評活動の典拠ないしは原動力となって、当時の時代精神そのものを創出していったことを浮き彫りにした。

(このような考察について、ドイツ語圏の研究者に対しても発信すべく、ドイツ語での論文も執筆した。)

(2) ドイツにおける民族至上主義台頭の背景を踏まえ、日露戦争前後から第二次世界大戦時までの日本における評論・論説に展開された〈民族精神〉論の内容を確認した。

〈民族精神 (Volksgeist)〉は、各〈時代精神 (Zeitgeist)〉の変遷のうちに生きている精神的プロセスである。18世紀から19世紀にかけてドイツで開花したロマン主義的な解釈では、詩人は〈民族精神〉と深い関わりを持ち、また過去や未来における国民像の最良の表現者であると考えられた。詩人や作家の使命と役割は、〈民族〉を創り出し、国民の歴史を語ることとなったのである。

このようなドイツの〈民族精神〉論から近代日本の評論家は強く影響を受けており、「高山樗牛と姉崎正治の論説における〈民族〉の発現」「中澤臨川の〈個人主義より民族主義へ〉」「寛克彦の〈日本民族日本国家といふ一心同体〉」「倉田百三の〈民族の覚醒〉」「久松潜一の〈国文学に於ける民族精神〉」「高山岩男の〈民族精神〉論」の項目を立てて、ドイツの〈民族精神〉論からの影響を受

けた近代日本の評論家による〈民族精神〉論の内容とその展開を整理した。

(3) 森鷗外の評論・小説作品を考察することによって、近代日本における〈文化〉が創造されてゆく場としての〈大学〉の理念について、また〈文化〉を創造する主体であり媒介である〈学問〉の定義について論究した。

すなわち、近代ドイツの大学理念や学問観に触れた鷗外は、自らの尊重する価値観を基盤として、ドイツの大学における〈学問の自由〉を礼讃することになったこと、学問は何か功利的な目的のための手段ではなく、真理を探究する営みそのものを意味し、大学はその学問の理念を実現する場であるという、ドイツ理想主義哲学によって生み出された学問・大学の定義を、鷗外が自家薬籠中のものとしたことなどを論じた。

学問の発展が人間の精神の〈自由〉と根源的に関わっていることを、鷗外の学問観が指摘していたこと、人間精神の〈自由〉によって体得される個人の〈教養〉こそが、人類が営々とその〈文化〉を創造してきた原動力であり、〈学問的真理〉の要求に内面的に対決する精神、エートスを生み出すことができるという認識に裏付けられていることを論証した。

(4) 20世紀前半の〈国民的自覚〉高揚期から〈近代の超克〉にいたるドイツと日本の〈民族主義〉と〈民俗学的研究〉の対応関係について論究した。

すなわち、ドイツの民族研究が、国民国家の現実的な危機のなかで、民族的な自己主張をするために、民族間の境界線の所在をめぐって周辺諸国と争わなければならなかったのに対して、大日本帝国の安定期に生成した日本民俗学では、近代化の流れのなかで危機感が抱かれ、生産活動に直接携わり民間伝承を担う〈常民〉としてのアイデンティティの再確認という意図で展開されたことを指摘した。

具体的には、ドイツの〈民族主義〉に抗したハイネの受容をとおしての近代日本における〈民族〉の登場、とくに柳田國男の談話「幽冥談」（「新古文林」明治38年9月）にうかがえるハイネの『流刑の神々』（Goetter im Exil）受容をとおしての〈民族〉認識について論究した。

『流刑の神々』と「幽冥談」の間に設定のズレがあっても、柳田はハイネの主張内容を把握しており、民間伝承の研究が、自国の国民性の特質を研究することになるという発想を柳田がハイネから得ていることなどを指摘した。

(5) 本研究課題の主目的ではなかったが、

派生的研究テーマである「地域研究としての郷土学」に連なる文章も発表した（〔図書〕の項目参照）。

ひとつは、『「Japan To-day」研究——戦時期「文藝春秋」の海外発信』（分担執筆）に記したように、ドイツ文化からの移入やドイツ文化への発信が、情緒や文学といった〈日本文化〉を豊かにするばかりでなく、ドイツ文化への、ひいては世界文化への貢献を果たすことになるという、〈日本文化〉を信奉する当時の知識人の見解についての考察。

もうひとつは、『コレクション・モダン都市文化 第65巻 海港都市・神戸』収録の「エッセイ・解題・関連年表」の執筆を通して、他国の文化や技術力に学ぶことが目的とされた〈博覧会〉という行事におけるドイツからの影響や移入について言及したこと。

すなわち、自国の〈文化〉レベルの高さや〈文明〉の進化の度合いを誇示することが趣旨とされた西洋各国の〈博覧会〉構想のなかでも、たとえば〈人間大砲〉など個別の行事企画において、ドイツ式の発想が活かされている点に言及したことなどを、副次的な成果として付記しておきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

① 林 正子 「柳田國男のハイネ受容による〈民族〉の発見——〈民族精神〉の高揚と〈民俗学〉隆盛の連環を考究するために」 岐阜大学国語国文学 査読無 第36号 2010 19～35頁

② 林 正子 「近代日本の〈民族精神〉による〈国民文化〉の系譜——ドイツとの比較を視座として」 岐阜大学地域科学部研究報告 査読無 第25号 2009 1～25頁

③ 林 正子 「翻訳：ミヒャエル・ヴェステフェルト著『ブラウエス・ヴンダー——ドレスデンで最も異彩を放つ橋』」 岐阜大学国語国文学 査読無 第35号 2009 23～56頁

④ HAYASHI Masako “Der Einfluss deutscher Ideen auf die Entstehung der modernen Nationalkultur in Japan II — OONISHI Hajime, Kaneko Chikusui und KUWAKI Genyoku — ” 岐阜大学地域科学部研究報告 査読無 第24号 2009 17～28頁

⑤ HAYASHI Masako “Der Einfluss deutscher Ideen auf die Entstehung der modernen Nationalkultur in Japan I — MORI Ogai, YAKAYAMA Chogyu und ANESAKI Masaharu — ” 岐阜大学地域科学部研究報告 査読無 第23号 2008 19～28頁

[学会発表] (計7件)

① 林 正子 「神戸の海港博覧会と文学散歩——『観艦式記念 海港博覧会』(1930年)を中心に——」 第5回地域研究報告集会 2011年3月6日 京都アカデメイア烏丸

② 林 正子 「地域研究としての郷土学」 第3回地域研究報告集会 2010年7月31日 関西大学尚文館

③ 林 正子 「近代日本における〈教養〉概念成立のための〈大学〉と〈文化〉」 日本比較文学会第72回全国大会シンポジウム 2010年6月20日 東京工業大学

④ 林 正子 「近代日本における〈民族精神〉による〈国民文化〉の展開——ドイツとの比較を視座として」 日本独文学会東海支部夏季研究発表会 2009年7月4日 愛知大学車道校舎

⑤ 林 正子 「日本とドイツにおける民族主義台頭と民俗学的研究の隆盛——柳田國男による〈民族〉の発見」 日本比較文学会第27回中部大会シンポジウム 2009年5月9日 名古屋大学文系総合館

⑥ 林 正子 「近代日本におけるハイネ受容の一側面——柳田民俗学への影と響き——」 第12回ハイネ逍遥の会 2009年2月21日 名古屋国際センター

⑦ HAYASHI Masako “Der Einfluss deutscher Ideen auf die Entstehung der modernen Nationalkultur in Japan” Asiatische Germanistentagung 2008 2008年8月28日 金沢星陵大学

[図書] (計4件)

① 鈴木貞美・編 作品社 『日文研叢書48 「Japan To-day」研究——戦時期「文藝春秋」の海外発信』 2011 全375頁
林 正子 執筆担当 「夏(佐藤惣之助)」 207～213頁 および「日本におけるゲーテ(茅野蕭々)」 231～238頁

② 和田博文・監修 ゆまに書房 『コレクション・モダン都市文化 第65巻 海港都市・神戸』 2010 全979頁
林 正子 執筆担当 「エッセイ・解題・関連年表・主要参考文献」 923～976頁

③ 小見山 章・監修 岐阜大学風土保全教育プログラム編 地域自然科学研究所 『森の国の風土論』 全151頁
林 正子 執筆担当 「第一部 風土概念とその意義 第四章 文学の創造契機としての風土——人間の自己了解から地域の内発的発展へ」 78～92頁

④ 日本近代文学会東海支部・編 風媒社 『〈東海〉を読む——近代空間と文学』 2009 全352頁
林 正子 執筆担当 「〈地域学〉としての〈郷土文学〉論——森田草平『煤煙』と江夏美好『下々の女』の〈故郷〉」 309～331頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 正子 (HAYASHI MASAKO)
岐阜大学・地域科学部・教授
研究者番号：30198858